

早稲田大学 国際教養学部 日本史 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	60分
特徴・その他	国際教養学部という特性もあるのだろうが、外交分野からの出題が多い。正解率が8割を切るようなら、その学習レベルでは早大の合格水準には達していない。覚えるべき用語の取捨選択が間違っているのである。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	12～14世紀の東アジア	8は難問。早稲田では元寇に関する問題が多いが、ここまですべて細かい用語を覚えておく必要はない。受験生はとにかくこういうびっくりする難問に目がいきがちだが、入試での出題率から考えると、この問題は無視して、他の問題を全問正解すべきである。消去法を使えば2も9もあっさり正解できる。	標準
II	近世初期の外交	早稲田が好むテーマからの出題である。正誤問題も定番のものばかりであった。10の「信牌」はめったに出ない「Eランク用語」であるため通常授業では扱わないが、夏期・冬期の講習で少なくとも2回以上は紹介している。しかも「早稲田受験者向け」と指定までしたうえで、である。大学ごとの傾向を分析して対策すると、こういうところで点差がつく。	標準
III	日米修好通商条約	昨年に続いて英文による大問が出題された。一般的に考えれば驚きの問題だが、国際教養学部が英語に強い人の受験する学部であることを考えあわせると「やや難」にはならないだろう。(2)の史料も、いくつかの英単語を見るだけで日米和親条約にある最恵国待遇を規定した条文だと推測できるだろう。ただし6は難問である。	やや難
IV	近代の外交	1・4・5がやや難しい。ただし1は消去法を用いて少なくとも2択にまでは絞り込みたい。早大入試では早稲田関係者が出題されることがよくあり、この選択肢もオ以外はすべて関係者であった。教科書学習だけではとうてい意識できないことだが、予備校の授業では早大関係者を折に触れ紹介しており、直前期にはその一覧プリントまで配布している。この問題では早大教授ではなく、早大出身者という条件が大きなヒントであった。	やや難

